毎日新聞　掲載記事（２０１７年３月１６日号２６面）

「自由に1人で過ごしたい」

当法人の地域福祉センター仁伍の取り組みと、ご利用者へのインタビューが掲載されております。

備後

「自由に1人で過ごしたい」

老いの人模様 介護の現場から（上）

小規模多機能型居宅介護 我が家での暮らしサポート

「もし、けがしなかったら。もし、無理して自宅に戻っていたら。そう思うとぞっとします」。地域福祉センター仁伍を宿泊利用する片岡寿郎さん(69)は口にする。

2月7日夜、福山市岩松町の木造2階建てアパートから出火。2階部分を焼失し、焼け跡の1室から住民の男性(69)が遺体で発見された。片岡さんの住まいは、亡くなった男性の隣室だった。布団も着替えも家財道具もすべて燃えてしまった。

隣室の男性とはほとんど付き合いはなかったが、同い歳の1人暮らし、人ごとには思えない。「自室にいなかったのは偶然と同居の助けが重なった結果。いたら、死んでいただろうな……」

片岡さんは島根県邑南町出身。中学卒業後は広島市に出て、働きながら定時制高校に通い、その後も建設作業員や塗装工をして暮らしてきた。結婚はせず、頼れるのは自分の身一つだけ。年齢を重ねて力仕事ができなくなり、3年ほど前に福山市内に移り住んでからは、自転車で街中を回って空き缶を集め、業者に売って日々をしのいだ。一日中空き缶を拾って300円ほど。食事もカップラーメンや缶詰ばかりで、体は動かなくなる一方だった。

状況を把握した市からセンターに支援要請があったのは昨年10月ごろ。時折、アパートにセンター職員が訪れ、掃除の支援や安否確認を受けた。ある日、室内で転び、起き上がれなくなっているところを職員に発見された。左の骨盤が折れていた。

退院しても、階段を上ることもままならず、1人では生活できない。片岡さんは、センターに一時、宿泊利用で身を寄せることになった。自宅アパートが火災に見舞われたのは、その間のことだった。

片岡さんの希望は1人暮らしを続けること。しかし、身寄りのない独居の高齢者に、家探しのハードルは高い。保証人のあてもない片岡さんの転居先探しは難航した。職員が手を尽くし、センターの過去の利用者の親族が、格安の家賃で部屋を貸してくれることになった。

今月中には新居での生活が始まる。「広島に来てから人のぬくもりに触れることのない人生だった。センターの人たちには親身になってもらった」と感謝しつつ、「やっぱり、自由に1人で過ごすのが性に合っているかな」と、ほっとした笑みを浮かべた。

◇◇

福山市木之庄町でNPO法人「地域の絆」が運営する小規模多機能型居宅介護事業所「地域福祉センター仁伍」は、職員約10人が地域の高齢者29人の生活を支える、介護の最前線の一つ。重度の認知症がある人から他に行き場のない人まで、利用者の事情と境遇はさまざま、職員が抱える思いもそれぞれだ。最前線で繰りなされる人模様を見つめた。

（この企画は目野創が担当します）

新しい住まいが見つかり、1人暮らしを続けられることにほっとした表情の片岡さん＝福山市木之庄町の地域福祉センター仁伍で

小規模多機能型居宅介護事業所
「通い」（週所介護）を中心に、利用者の必要に応じて「短期宿泊」（ショートステイ）、「訪問介護」の3種類のサービスを組み合わせて利用できる。1事業所につき利用者登録は29人以下とされ、小規模で地域密着型の家庭的な環境で、利用者の自立した生活を支援する。3サービスを一体で受けることで、要介護度が上がっても、できるだけ住み慣れた地域での生活を続けられるようにするもので、国の目指す地域包括ケアシステムの中軸を担う。